



「ローカルThink & Doタンク」の必要性

北海道大学公共政策大学院 教授 今井 太志

今号で紹介する書は『まちづくり幻想—地域再生はなぜこれほど失敗するのか』(SB新書)(木下斉／著、SBクリエイティブ、990円)である。同書はあえて刺激的な言葉で、地域再生の失敗要因をいくつかの「幻想」として描き出す。例えば、「安くして、たくさんの人に地元を知ってもらうのが善という幻想」、「成功事例をまねれば成功するという幻想」、「お金がないという人ほどお金がかかる事業を始めたがる」等である。中でも、筆者が特に紹介したいのが、「東京の有名なシンクタンクやコンサルタントを過剰に持ち上げるよそ者幻想」である。著者は、そのことが執行能力どころか判断能力も失わせ、自分たちでは何もできなくなることにつながるとする。地元の人たちで計画を組み立て、事業を立ち上げるのが基本であり、もし地域にできる人物がいなければできるようになってもらうために教育投資を行うことを強調する。都会のコンサル依存の問題性は、前号で紹介された『過疎ビジネス』でも、小さな自治体に近づき公金を喰い物にするコンサルと、地域の重要施策を民間企業に丸投げした自治体の姿が生々しく描かれていた。

一方で、現在地方部の多くの自治体で採用困難化と中途退職者増が進む中では、自治体が外部人材を活用すること自体を否定しても問題は解決しない。ポイントは、連携して地域課題の解決に取り組む外部人材が、地域に根差した組織であり人材であることではなかろうか。このような観点から、筆者は各地域が「ローカルThink & Doタンク」を有するこ

との必要性を提起したい。そもそも都会のコンサルに業務を頼んだとしても、ThinkはできてもDoまでは頼めない。しかし、地域が最も求めているのはむしろ実行する人間である。ローカルThink & Doタンクが、地域が抱

える公の課題に関し、役場と一緒に企画から実行までを伴走することができれば、地域の人材が育つとともに、コンサル費用が地域のお金として残ることにもなる。また、地域にローカルThink & Doタンクがあり、そこが自分を育ててくれる、挑戦させてくれる組織と思えば、就職先として考える若者は少なくないであろう。

地域が自ら考え、行動することの重要性は改めていうまでもないが、そこでいう地域とは自治体職員のことだけを指すものではない。職員が矜持をもって地域課題に向き合うとともに、人手不足の中、地域の人たち、特に若い世代が主体性をもって地域課題の解決に関われる仕組みを創り上げることが、これからの地方創生の要諦と考える。



『まちづくり幻想—地域再生はなぜこれほど失敗するのか』
木下斉／著 SBクリエイティブ